

鬼桃太郎

尾崎紅葉

青空文庫

むかしく、翁は山へ柴刈に、
 媼は洗濯の河にて、拾
 ひし桃實の裏より
 生れ出でたる桃太郎、
 猿雉子犬を引率して
 この鬼ヶ島に攻來り、
 累世の珍寶を分
 捕なし、勝矜らせて
 還せし事、この島末
 代までの耻辱なり、
 あはれ願はくは武勇
 勝れたる鬼のあれかし
 其力を藉てなりともこの

遺恨霽さばやと、時の王鬼

島中に觸を下し、誰にても

あれ日本を征伐し、桃太郎奴が

若衆首と、分捕られたる珍寶

を携へ還らむものは、此島の

王となすべしとありければ、血氣に逸る

若鬼輩、ひこくと額の角を蠢かし、

我功名せむと想はざるはな

けれども、いづれも桃太郎

が技※に懲り、我はと名乗出

づるものもあらざりけり、

茲に阿修羅河の畔に

世を忍びて、侘しく住

みなせる夫婦の鬼あり

けり、

舟曲超回岳汝東
看知貴岳時好時
時如時好時好時
守安東東東好守

舟曲超回岳汝東

守安東東東好守

もとは鬼おに介が

島しまの城じやうもん門の

衛まもり司つかさにてあ

りけるが、桃もも

太郎たらう攻せめ入いりの

砌みぎ敢あへなくも

鐵てつの門とびら扉を打うち摧くだかれ、敵てきぐん軍を

乱らん入にふに及およびし條でう、其その身みの懈おこ怠たりに因よるものなり

とて、斜ななめならず王わう鬼おにの勘かん氣きを蒙かうり、官くわんを剥はがれ世よに疎うとれ、

今いまは漁ぎよ人じんとなつて餘よめい命めいを送おくるといへども、何いつ日は身みの罪つみを償あがうて再ふたび

世よに出いでむことを念こゝろ懸がけ、

子こ鬼おに

の角つの

の束つかの間まも



忘るゝ間ひまぞなかりける、さるる
 ほどに此このふれ觸きを聞く嬉うれしき、茨木いばらき
 童子どうじが斷落きりおとされし我わが片腕かたうでをも見みた
 らむ心地こゝちして、此時このときなりと心こゝろばかりは
 逸れども、嚮さきに城門じやうもんの
 敗戦やぶれに桃太郎もつたらうと巨合わたりあ
 はせ、五十貫目ごじつくわんめの鐵棒てつのぼうもて、
 右の角みぎつのを根元ねもとより摧折ひしをられた
 る創きずの今いまに疼いたむこと頻しきりにして、
 不治ふぢの疾やまひを得えたりければ、合戦かつせんな
 むと思おもひも寄よらず、かゝる時とき子こだ
 にあらばと頻しきりに妻つまなる鬼おにを罵ののし
 されば妻つまの言いひけるは、傳聞つたへきく日本にっぽんの
 桃太郎もつたらうは、河かはに流ながれし桃もつより生うまれて武ぶ
 勇拔群ゆうぱつぐんの小兒こせがれなり、尋常なみぐなる鬼胎おにのはら
 より出いで

鬼桃太郎

むかし、翁と山へ柴刈に
姐と洗濯の河よて拾

ひし桃實の裏より

主と出てたる桃太郎

猿雉子犬を引率して

この鬼ヶ島よ攻來り、

累世の珍寶を分

捕ふし勝誇らせて

還せし事と此島末

代まぐは耻辱あり

あもれ願くは武勇

勝とさる鬼のあれう

其力を藉てありとも此

遺恨齎さむやと時の王鬼

島中よ觸を下し誰よても

あれ日本を征伐し桃太郎奴が

若衆首と分捕らまざる珍寶

を虜へ還つむりのく此島の



なむ鬼兒にては、彼奴が敵手とならむこと

おほつか 覚束なし、妾夜叉神に一命を奉げて、桃太郎

ふたつがけ 一倍なる武勇の子を誘ふべしと、阿修羅河

きし 岸なる夜叉神社に参籠し、三七日の夜に

して始めて靈夢を蒙り、その拂曉水際に立

いで、見れば、いと

おほ 大きな苦桃一

つふは、顛浮波々と浮來りぬ、扱はと嬉しく

いだきかへ 抱還れば、待構へたる夫の喜悦たと

ふる方なし、

割きて見れば果せるかな、核お

のづから飛で坐上に躍ると見

えしが、忽焉其長一丈五

尺の青鬼と變じ、紅皿の

ごとき口を開き、爛々た

王とふすべしとありけきく血氣は還る
若鬼索ひしくと額の首を齧りし

我功名せむと想えさるるか

けきともいづれも桃太郎

ケ技倆は懲り我くと名乗出

づるものとあらさきりけき

茲に阿修羅河の畔に

世を忍びて住く住

みかせる夫婦の鬼あり

けで



まこと鬼介

鳥の城門片

衛司よてあ

りけるが桃

太郎攻人の

砌敢かくも

鐵の門扉を打摧りれ敵軍

乱入に及びし餘其身の懈怠は因るものあり

とて斜らうに王鬼の勘氣を蒙り官を剥かれ世に疎れ

今と漁人となつて餘命を送るといへとも何日は身の罪を償うて再び



る火※を吐て轟と立た

る其風情、鬼の眼にさへ

恐ろしくも、また物凄くぞ見えたりける、

苦桃の裏より生まれればとて苦桃太郎

と名乗らせぬ、扱夫婦所志よしを語りけれ

ば苦桃大いに喜び、易き事かな、我一跨に日本へ推渡り、三指にて桃太が

そつ首引抜き、其國の珍寶の有らむ限り引攫うて還るべし、

これより出陣くと勇み立てば、夫婦

のいふやう、此條王鬼に

届出でずして我儘に出立せば、或ひは功

も功とならずして、却て咎のあらむも

測り難し、夫婦は罪を負ふ身の

拜調愜はざればとて、苦桃太郎

單身して王城に到らしめ、桃太郎

征伐の義を言上しければ、王鬼火※

世に出でしことを念懸け

子忠

の

角

此東の間も
忘る、間をあうりける、さる

目と此禍を聞く嬉しき茨木

童子が斷落されし我片腕をも見さ

らむ心地して、此時ありと心はうりて

逸こども嚮ふ城門の

敗戦は桃太郎と旦合

くせ五十貫目の鐵棒もて

右の角を根元より摧折れど

る創の今も疼むこと頻りよして

不治の疾を得さうけとむ合戦あ

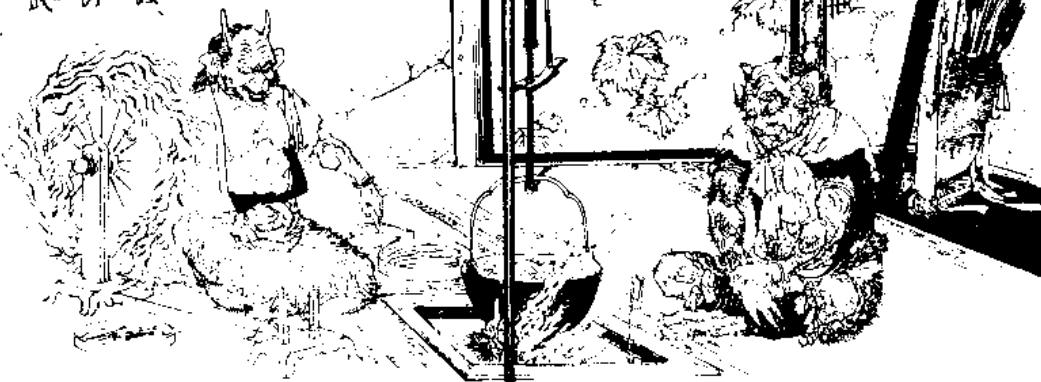
むと思ひも寄らばくる時子ど

よあらむと頻りよ妻かる鬼を罵りぬ

されと妻共言ひけるを傳聞く日本の

桃太郎と河は流と一桃より生れて武

勇技群れ小兒なり尋常ある鬼胎より出で



を吐はきて悦よろこぶこと限かぎりなく、八角はつかくに削けづり成な

して二百八十八箇かの銀ぎん星ほし打うたる鐵てつ棒ぼうを

賜たまひ、爾なんぢ之れを以もつて桃奴ももめが腰骨こしほね微塵みじんに碎くだけよとありければ、

苦桃がも太郎たらう冷あざ笑わらひ、桃太郎ももたらう風情ふぜいの小童こわつぱ十人二十人、虱しらみを拈ひね

安なんぞ武器ぶきなどの入いり候くらべき、

假かり初そめにもかゝる物ものを賜たまふ

事こと頗ごる某それがしが武勇ぶゆうを氣遣きづか

ひたまふに似にたり、無礼ぶれい

は御免おんゆるし候へ、これ御覽ごらんぜ

よ方かた々／＼と、側そばなる鐵てつの圓まる柱ばしら

を小指こゆびもてゆらくくと盪おしうご揺こか

せば、滿座まんざ齊ひとしく色いろを失うしひ、やれ

苦桃がも技て※は見えたり、止やめよくと

震慄おのきけり、

王鬼わうおに近ちかく苦桃がもを



かむ鬼兒よてく彼奴が敵手とからむこと
 覺束かく、妾後又神よ一命を奉けて桃太郎
 二倍ある武勇の子を禱るべしと、阿修羅河
 の岸ある夜又神社に參詣し三七日の夜よ
 して始めて靈夢を蒙りその拂曉水際よ立
 出で、見れむいと

大きなる苦桃

頼浮波々々と浮來りぬ扱くと嬉しく
 抱還れむ待構へさる夫の喜悅さとい
 ふるが如し、



割きて見まじ果せるうな核ふ
 のつらから飛で生上に躍ると見
 えいづ忍馬具長一丈五
 尺の青鬼と變じ紅血吐
 ごとき口を開き爛々さ
 る火筋を吐て轟轟立さ
 る其風情鬼の眼よさへ
 恐ろしくもよ物凄くを見えさりける、



苦桃の裏より生まれまゝてて苦桃太郎
 と名乗らせぬ叔大姉所志よを語りけま

招まねきて、かかなんぢる爾

が武ふゆう勇もつを以て

せば、桃もつたらう太郎

を滅ほろぼさむ

事こゝろ疑たがひなし、別べつ

に取とらすべきものありと、

自みづか家らは穿はぎ

たりし白びやく

虎この生いき皮がも

て造つくれる禪はかまを解ときて

投なげ出しただま

へば取とつて戴いたぎ、

双そうの角つのに引ひ懸きけ、

手て振ふり足あし拍べう子し

可を笑かしく外げ道だう舞まひ

む苦桃大い喜び易き事な我一跨に日本へ推渡り三指よて桃太

その首引抜き其國此珍寶の有らむ限り引掣うて還るべし

これより出陣くと勇み立てて大婦

のいふやう此條王鬼よ



届出てすして我儘よ出立せむ或ひも功

も功とからずして却て咎のあらむり

測り難く夫婦を罪を負ふ身の

拜満愜もされごとて苦桃太郎

單身して王城に到らしめ桃太郎

征伐の義を言上りけきむ王鬼火焔

を吐きて悦ぶと限りふく八角は削成

して二百八十八箇の銀星打さる鐵棒を

賜ひ爾之を以て桃奴が腰骨徹壓し碎けよとありけきて

苦桃太郎冷笑ひ桃太郎風情の小童十人二十人風を拈るよりか不易きに



といふを舞ひ、喜び

勇むで退出けり、

明日ともなりぬれ

ば王城より使者向

ひて、鐵線の囊に人

間の髑髏の附焼十

箇を盛りて、かの桃

太郎が黍團子に擬

へ、之を兵糧にとて

賜はりぬ、

徂々て鬼个島の堺

に來りたる頃、魔風遽に颯々と吹荒

み、瀑のごとくに暴雨沃ぎて天地鳴

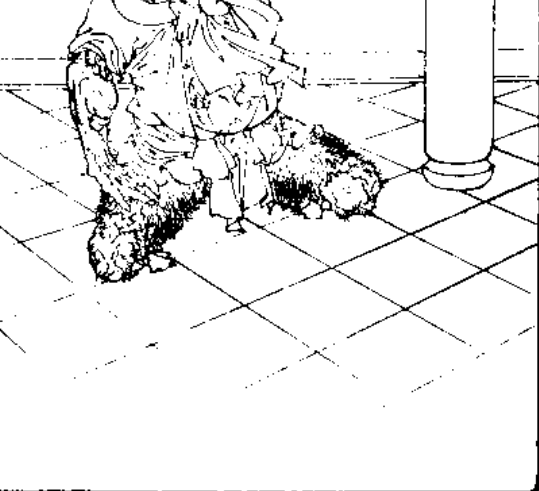
動し、坤軸も折るゝかと思ふばかりなり、

あら心地好き光景やと、少

安そ武器をこの入り候へき
 假初ももかゝる物を賜ふ
 事頗る某が武勇を氣遣
 ひさまふも似たり、無礼
 文御免し候へこれ御覽せ
 よ方々と側なる鐵の圓柱
 を小指もてゆらくと激揺ら
 せは満座齊しく色を失ひやれ
 苦桃枝揃て見えたり止めよくと
 震慄きけり、



王鬼近く苦桃を
 招きてかめる爾
 が武勇を以て
 せむ挑太郎
 を滅ぼさむ
 事疑ひかゝり
 よ取らねべきものありと



時立留したちとどまつて四方しほうを吃きつと見みてあ
 れば、魔王まわうがだけ嶽たけの絶頂ぜつてうに當あたりて、電でん
 光くわうひらめの閃うちく裏うらに金色こんじきの毒どく龍りゆう現あら
 はれ、此方こなたを目懸めがけけて箭やを
 射いるごとく飛とび來きたる、やあ小こ
 賢さかしき長なが虫むしの通力つうりき立だて、寄よらば目めに物もの
 見みせむと刀ちからあし足ふみ踏な鳴ら
 して身構みがまふる間まに、かどくの毒り龍りゆう舞まひ
 下さがりて太郎たらうが前まへに蝮とぐ屈く
 こと十三卷まき、舌したを吐はき首くび
 を俛たれていふやうは、某それがしは
 魔王まわうがたけ嶽たけの絶頂ぜつてうなる湖みづ水みに
 歳とし久ひさしく棲すめる龍りやう王わうなるが、
 日本にっぽんの地ちに罷まかりある眷族けんぞくの蛇類へびども、か
 桃太郎も、たらうが家臣かしんなる雉子きじの一類いちるみの爲ため

自家穿き

さりー白

虎の生皮も

て造れる陣を解き

投出したま

へて取て戴き

双の角よ引懸け

手振足拍子

可笑く外道舞

といふを舞ひ喜ひ



勇じて退出けり

明日ともありぬま

で王城より使者向

ひて鐵線の費に人

間の襦袢比附焼十

筒を盛りてかの桃

太郎が泰園子よ擬

へ之を兵糧よとて

賜くりぬ

祖々て鬼个島の塚



に、食まるゝこと年々その数を知らず、
いかにもして此遺恨報へさ

ばやと思ふ事久しけれど、孤

獨の力及び難く、無念を呑で瞋恚

の炎を吐く折から、將軍此度桃太

郎征伐のよしを聞及び、願はくは

御手に随従して微力を竭し、

御威勢を以て一族の積る恨

みを散ぜんとして、これまで

御出迎ひ仕つりぬ、あはれ

御從軍 御許あらば、身の面目之に過じとありければ、

苦桃太郎喜悅淺からず、腰なる髑髏一個取ら

せて主従の契約を結びぬ、

爾時 毒龍のいひけるは、往時桃太

郎は雉子猿犬の三郎党を従が

よ来りたる頃魔風遊は颯々と吹荒
み瀑社ごとくに暴雨沃きて大地鳴

動く坤軸も折るやうと想ふばかりなり

あら心地好き光景やと少

時立留つて四方を屹と見てあ

れで魔王撒は絶頂に當りて電

光の閃く裏に金色の毒龍現

それ此方を目懸けて箭を

射るごとく飛來るやあ小

賢き長虫の通力立寄



らむ目よ物

見せむと刀足踏鳴り

しく身構ふる間よかの毒龍舞

下りて太郎の前は蜷屈

こと十三卷舌を吐き首

を俛れていふやうて某は

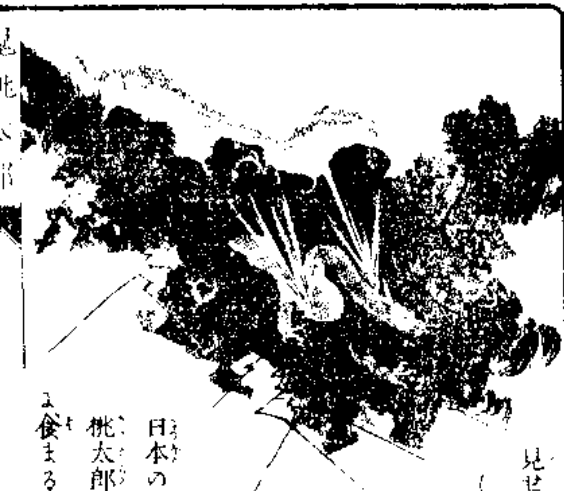
魔王撒は絶頂なる湖水に

歳久しく棲める龍王なるか

日本の地は罷在る存族共蛇類

桃太郎が家臣なる雉子の類は為

は食まること年々の教を知らず



北の

九

へて、大勝利を得し例に倣ひ、

将軍も亦好郎党を召たま

はずや、某が無二の交を結

べる二頭の勇者あり、も

し御意あらば立所に

召寄すべしとの推

擧に、千羊の皮

は一狐腋に

如かずの本

文、なまじひ

なる

輩は却て足手

纏なれど、御身が信じて一

方の大将ともなすべき器

量ありと

はやと思ふ事久しけしと狐
 備の方及び難く無念を吞て腹患
 の突撃を吐く折々、將軍此度桃太
 郎征伐のよしを聞及び願くは
 御手へ随従して微力を竭し
 御威勢を以て一族の積る恨
 めを散せんとてこれまで
 御出迎ひ仕つりぬ、あおれ
 御從軍御許あらむ身は面目之工過しとまりりまを



苦桃太郎喜悅淺からば腰ふる獨難 個取ら
 せと主従の契約を結びぬ
 爾時毒龍片いひけるも伴時桃太
 郎も雄子猿犬は三郎党を従
 へて大勝利を得し例も倣ひ
 將軍も亦好郎党を召さま
 えすや果か無しの交を結
 べる二頭の勇者ありも
 御意あらむ直所よ
 召寄すべしとの推



せば、さうく 早々

その者ものを召寄めしよせた

まへといふ、おそねほ 恐多おそき

まうしぶん 申分さふらには候あつへども、るゐ 類

は友ともを以もつて聚あつまる

の喩たと、其それが不肖むせうとい

へども魔王まわう獄がたけ

の龍王りようわうなり、

ほんぞく 凡俗こりなる狐狸こりの

ともがら 輩

を友ともと

せむや、

まづめしよ 召寄

せて見げんざん 参

に入れむ

と、
二一振三振尾

を掉れば響宛然金鈴のごとし、之を合圖に

北方より忽然として白毛朱面の大狒飛來

り、西方よりは牛かと思紛ふばかりの狼

躍出でて、一齊に太郎が前に額け

ば、苦桃岩角に腰打懸け、鳩の羽

扇にて塵ねき、實に頼もしき器

量骨格、狒は猿の首領にして狼

は犬の強敵たり、之に加ふるに

毒龍あれば、桃太郎を一戦に

撃破らむ事、鐵槌を以て

土器を摧くがごとし、いざ

引出物取らせむと、また二

箇の髑髏を與へ、いでや出陣と立上れば、毒龍再び策

を献じていはく、某に飛行自在の術の候、瞬時にして

日本國にっぽんこくに到いたるべしと、虚空こくうに向むかつて呼吸いきを吐はけば、
 不思議ふしぎや黄雲くわううん遽にはかに然蒸むして眼前がんぜんに聚あつりぬ、主從しゆうじう之これに打うち
 乘のり、宙ちゆうを飛とぶこと西遊記さいいうきの繪ゑのごとく、一晝夜いつちゆうやにして
 眼がん界果がいしなき大おほ洋ほうの上うへにぞ來きたりける、
 苦桃太郎にがもつたらふしん不審おこを起おこし、我等われら神通力じんつうりきを以もつてかく飛行ひぎやうしなが
 ら、未だ日本にっぽんの地ちに着つかざる理りなし、毒龍どくりようこ爰こゝは鬼个島おにがしま
 を去さること若干里いくばくぞ、さん候おほよそ、大約おほよそ十二万三千四百五十六億七千八
 百九十里ひやくきゅうじゅう、おつと其それ
 は行過ゆきすぎたり、
 戻もどせくと逆飛雲ぎやくひうんの法はふ
 を行おこなはせて、無二むに
 無三むさんに退もどるほどに還かへるほどに、
 また戻過もどりすぐること九十八万七千六百五
 十四億三万二千と一百
 里、これではならぬと

輩を却て足手

纏ふれと御身が信下

方の大将ともあすべき器

尉ありと

せし甲々

この者を召寄せた

まへといふ恐多き

申せよと候へども類

も友を以て衆まる

の喻甘不自とい

へども魔王候

擧に千羊の皮

そ 狐腋

如うずの本

文あま十一ひ

ある

を友

せむや

まつ召寄

せて見交

よ入れむ

と二振三振片

の龍王より
凡俗なる狐狸は

また出直して、行けば行過

ぎ、戻れば戻過ぎ、行つ戻りつ、戻りつ行きつ、

左へ翔り右へ走り、四面八角縦横無盡に飛

廻るほどに、流石の毒龍の魔力も限あれ

ば次第に疲れ、雲は弱りて薄れ行き、今は

古綿のごとく此處も寸断れ彼所も寸断

れて、放下たる空隙より踐外して、狒狼は

敢なくも泡立海に落入りて、鰐魚の餌食

となりけらし。

苦桃太郎之を見るより奮然として怒を

爲し、おのれ毒龍、爾が魯鈍の故を以て、股肱の臣を喪ひ

たるぞ、軍陣の門出に前

徴悪し、憎くき奴

と拳を固めて、

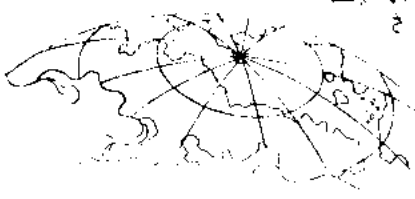
毒龍の眞額



轟轟と響然金鈴のごとく之を合闘す
 北方より忽然として白毛朱面の大柳飛來
 西方よりと牛かと思紛ふてうりは復
 躍出てて一齊に太郎の前を顔け
 て苦桃岩首を腰打懸け鶴が羽
 扇にて摩ねき實に頼もしく器
 量骨格神と猿の首領として猿
 士の大の強敵となり之に加ふるに
 毒龍あまた桃太郎を一戦に
 撃破らむ事鐵槌を以て

上器を催くごとく、いさ
 引出物取らせむと、まご二

筒は觸機を與へいてや出陣と立上りて毒龍丹以策
 を献じていく其は飛行自在の神の候、瞬時よいて
 日本國に到るへいと、虚空に向つて呼吸を吐けて、
 不思議や黄雲遮然然として眼前に聚りぬ、主従之よ打
 來り宙を飛ぶこと西遊記の繪のごとく、一晝夜よいて
 眼界果しかき大洋のトよそ來りける、



苦桃太郎不亦を起し我等神通力を以てうり飛行しふが
 ち長し日本の地は着るさる理か、毒龍爰と鬼今島

砕くだけよと乱らん

打うちに撃うちければ

もとより暴あらし氣き

の毒どく龍りゆうは發いかり憤りの

眼まなこに朱しゆを濺そぎ、金きん

の鱗うろこを逆さかてたるは木この葉は

に風かぜの吹ふごとし、

やあ小こ憎にくきおのれが 大たい將しやう面づら、

いで龍りやう王わうが本て事なを見みよと、十じつ間けん

餘あまりの尾をを風かぜ車くるまのまごとくに舞ま

はして、苦にが桃も太たらう郎らうを七なな卷まきに卷まき裏くるめ、骨ほも微み

塵ちんと固しめつければ、物もの々々しやと苦にが桃も太たらう郎らう、惣そう身み

にうんと力ちからを籠こむれば、さしもの毒どく

龍りやう弗ふつつと斷きれ、四よ段だんとなつ

て休たふるれば、魔まり力ちから忽ちま

を去ること若干里々、候大約十二万三千四百五十六億七十八

百九十里、たつと其

一行過さざり

灰せくと逆飛雲月法

を行ふくせて無

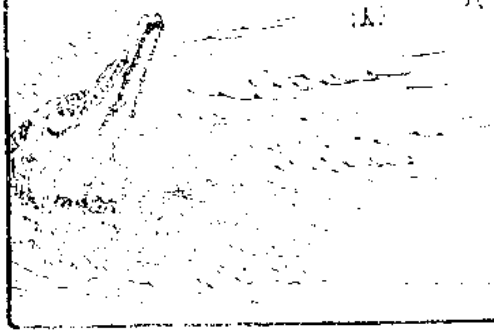
無三退るほどは還るをよ

まは灰過ぐること九十八ク七百六十五

十四億三方二十と一

里おれてもふらなと

まの山直して行ける行過



ぎ灰れも灰過き行つ戻りつ戻りつ行きつ

左へ翔り右へ走り四面八角縦横無盡に飛

廻るかと云流石は霹靂の儘力も限あは

を次第に灰ま雲も夠りて薄れ行き今

古綿はことと此處も寸断れ彼所も寸断

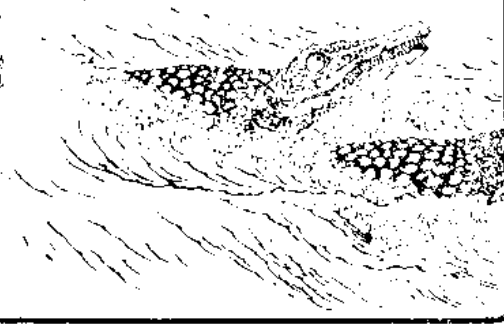
れて致下さる空隙より踐外して狒狼こ

敵あくも泡立海は落入りて鰐魚は餌食

とありけらく

若柳太郎之を見るより奮然として怒を

寫すかのれ母龍雨り塵鉦の故を以て股脰の臣を喪ひ



とくも ふきけ
解けて雲は吹消すご

とくなくなれば、

なに もつ たま
何かは以て堪るべ

にがもく たらはる
き、苦桃太郎迢

こくう
々《か》の虚空より

あしは うしな
足場を失ひ、小石の

まいちもんじ
ごとく眞一文字に

まひさが
舞下りて、漫々たる大海へぼかん！

さるを車輪其門出より前

微塵も憚りなき奴

と拳を固めく

毒龍の狂瀆

砕けよこ見

打と撃けれど

もこより暴威

の毒龍は發頭の

眼よ朱を翳さ奉

此鱗を逆とさるも木葉

よ風は吹こと

やあ小憎きたれのれが大将前

いて龍王が不事を見よと上間

餘りは尾を風中のごとくよ舞

ろしく昇桃太郎を七巻よ巻裏の骨も徹

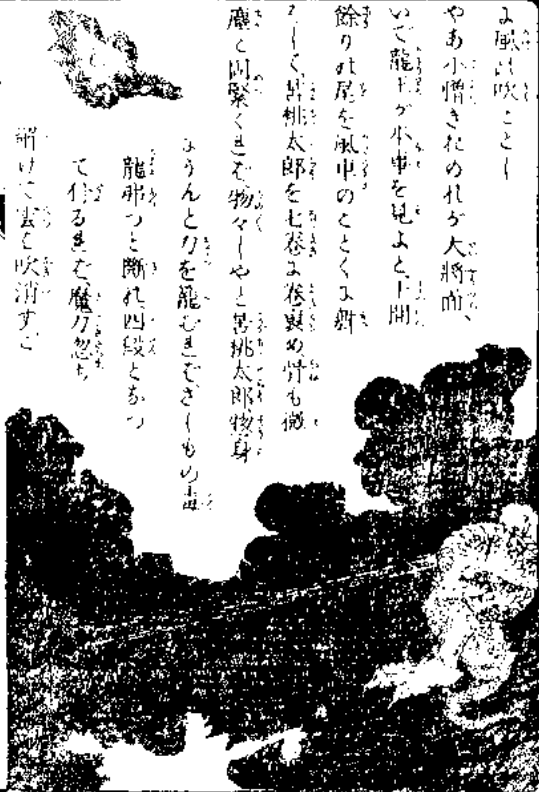
塵と固緊くまを物々やと昇桃太郎後身

ふうんと力を龍心までさくもの土

龍牙つと斷れ四段とあつ

て付るまを魔力忽ち

消けて去と吹消すこ



とくかくあれは

何うそ以て堪るべ

き苦桃太郎遊

々の虚空より

足場を失ひ小片に

ことく眞一文字よ

舞下りて漫々さる大海へほうん

左

藤もふ花



青空文庫情報

底本：「名著複製 日本児童文学館 第一集」ほるぷ出版

1976（昭和51）年5月発行

底本の親本：「鬼桃太郎」幼年文学叢書、博文館

1891（明治24）年10月11日印刷出版

初出：「鬼桃太郎」幼年文学叢書、博文館

1891（明治24）年10月11日印刷出版

※表題は底本では、「鬼桃太郎《おにも、たらう》」となっています。

※変体仮名は、通常の仮名にあらためました。

※挿絵は底本に収録されている富岡（藻齋）永洗（1864（元治元）年～1905（明治38）年）のものを使用しました。

※「苦桃太郎」に対するルビの「にかも、たらう」と「にがも、たらう」、「阿修羅河」に対するルビの「あしゆらかは」と「あしゆらがは」、「爾」に対するルビの「なんぢ」と「なんち」、「武勇」に対するルビの「ぶゆう」と「ふゆう」の混在は、それぞれ底本

通りです。

※改行及びルビが単語単位ではなく分割されているのは、底本通りです。

入力：田中哲郎

校正：みきた

2018年12月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼桃太郎

尾崎紅葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>